「日々の理科」（第 402 号） 2015（H27),-8,-9

「妖精の輪（２）」

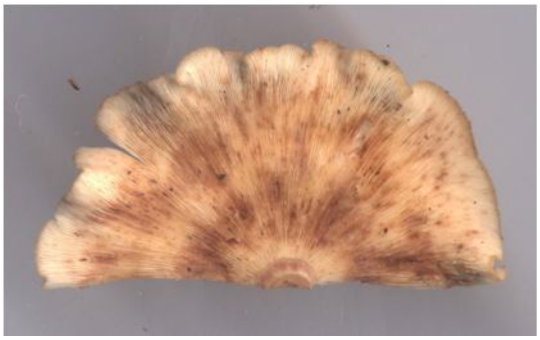
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

菌輪を形成するキノコは多くない。ほとんどのキノコは、散生（バラバラに発生)、孤生（１本ずつ離れて発生)、群生（一ヶ所にかたまって発生)、束生（根元がくっついて発生）などの形をとる。倒木や立ち枯れの樹木の幹に発生する「木材腐朽菌」という種類も多い（ナメコ・エノキタケ・シイタケなど)。

モリノカレバタケ（森の枯葉茸）というキノコがある。薄橙色の地味なキノコで、雑木林や混交林（針葉樹と広葉樹が混ざった林）の林床に、ごく普通に見られ、菌輪を形成するとされる。詳しく観察してみた。

「モリノカレバタケ」　*Collybia dryophila*
ホウライタケ科 / 北軽井沢のカラマツ林で撮影

写真は、傘と茎をたて割りにしたところである。キノコの種名同定には、傘の裏のヒダ（胞子を形成するところ）の密度、茎との接合のしかた、それに茎の中が密か中空か、といった点が重要になる。モリノカレバタケはヒダが密で、茎は中空というのが特徴だ。キノコの茎は、傘を高く持ち上げて、胞子の飛散を助ける役割がある。モリノカレバタケのように傘が軽いキノコでは、茎は中空で十分なのだ。中空のほうが、使う菌体の量が少なくて済み、成長も速い。その分子実体の数を増やすことができて、有利なのだろう。



ヒダは、シイタケと同じように非常に密である。この個体は、すでに胞子は飛ばしたあとのようだ。

上は、傘が開きっていない、若い個体である。キノコは幼菌→若い個体→成熟した個体と成長するに従って、姿を大きく変えるものが多く、同定には注意が必要。モリノカレバタケの場合も、若いものは傘が丸三角形で、色も全体に黄土色をしている。右側は断面写真だが、傘裏側のヒダが非常に密であるとわかる。まだ胞子を飛ばしていないので、色が濃い。また茎も新鮮で、中空であることがよくわかる。　（つづく）